に胚胎し來たりたるものなるが故に、徹頭徹尾人格的性質を有しをるものとす、人或は宗教の宗教として實際に役立つ所の者は人格的存在者を立するの邊に在りて存するは恰も西洋にては基督教東洋にては佛教の淨土教が勢力を實際の社會に占有しをるに由りても自ら明かなりと說くものあらんと雖、その人格的なる語の意味にもよれ猶太教に所謂エホヴの如き人格的存在者を立するは吾人到底之れを今日の智識經驗に照らして信憑する能はざるものとす、然るに基督教に於てはその漸々發達するに從ひその所謂神なるものは次第に進化し來たりたるも尙ほ依然その原始的

の不可思儀的奇蹟を行ふの人格的存在者たる性質は時々その鋒鋩を表はしつゝあるものなり、是れ基督教の弱點なり、之れに反して佛教は元來釋迦が哲學思辨の結果思惟觀察の餘に成りしの教なるが故に、頗る理論に長じたるの點あり、故に如何に之れを後世卑近簡易に說明解釋せんとせしにも關はらずその根底は元來佛教の印度風の特色たる哲學思辨の礎上に成立しをるが故に、頗る高遠幽邃なる確乎たる根底ありて存するを見る、是れその長所なり、斯くの如く一見しても佛基兩教には長所と短所と併はせ存在しをる所のものなれば、今や吾人は佛基兩教とも其長所ありて存す

るを認知すると同時に其短所をも併せて之れを承認せざる可からざるものありて存するを見る、果して然らば將來に於ける宗教は古來の佛基兩教に斯く一長一短ある以上は佛基兩教中其一のみを以てしては、吾人は到底滿足する能はざるものにて必ずや當に佛基兩教以上の宗教を要求し來るや理の當然なりとす。

第二節　佛基兩教の調和

吾人は佛基兩教の何れを以てするも到底滿足するを得ずして必ずや當さに此兩者以上の宗教を要求せざる可からず、果して然らば之等兩教以上の宗教とは果して如何なるものなるか、曰く先づ第一に斯かる宗教

は佛基兩教の長所短所を充分比較的に攻究考察して各自その粹を拔き來りて構成せられたるものならざる可からず、蓋し人或は佛基兩教の融合調和を以て到底不可能なるが如く說くものありと雖、是れ思はざるの甚しきものにして決して然らず、何んとなれば佛基兩教も共に是れ健全なる同一人生の同必須の因由に由りて生起し來たりたるの結果にして、而て今や吾人に由りて明かにその優劣長短の在りて存する所以を意識せられ、更らに一層之れより優勝なる健全の信仰を要求されつゝある以上は、佛基兩教の粹を革め純を拔き來り以て之れを融合調和して健全なる信仰樹立

の要素となす又敢て不可能なるとに非ざればなり、見ずや彼の猶太に於ては基督降生の頃より希臘猶太の思想は滔々と埃及の歴山府に於て相會合し來たり互ひに相接近密邇せるの極遂に互に相和し相合して此に中世紀に於ける寺院的神學的基督教なるものを醞釀し來たりたるに非ずや、然れば猶太思想と希臘思想とはその一は宗教的にして他は哲學的なりその一は獨斷的にして他は批評的なりその一は空想的にして他は經驗的なるにも拘はらず、遂にその融合調和を見るに至りたるものなれば、現今我國に於けるが如き縱令東西兩洋の宗教思想は如何に相徑庭し異同しをるにもせよ、共に是れ同一宗教思想なれば此同一宗教思想が遂に融合調和を見るに至らざるの理は吾人到底之れを想見する能はざるものなり、而て余の見る所を以てせば將來に於ける宗教の健全なる新信仰の基礎を樹立せんとせば、必ずやその要素としては先づ佛基兩教の長所短所を一々批評的吟味の試驗石に懸けて攻究闡明し、而て之等兩教の粹を擢き純を蒐めて之れを以て健全なる新信仰の要素に充つ可きものとす、換言すれば將來の宗教は必ずや當さに佛基兩教を打て一團と爲せる之等兩教の融合調和上に成るものならざる可からざるなり。

第三節　健全なる科學哲學の智識

健全なる新信仰をして樹立せしめんとせば必ずや當さにその要素としては佛基兩教に負ふ所無からざる可からざるや勿論なりと雖、單に佛基兩教の粹を擢き純を蒐め來たりたるのみにては、未だ以て健全なる現今に進歩したる吾人の智識經驗を成せる精神全幅を滿足する能はざるものとす、何んとなれば吾人は佛基兩教以上に立ちて尙之れより一層完全なる新信仰の樹立を要望して止む能はざるものなればなり、此に於てか吾人は佛基兩教以外に現今に進歩せる科學哲學と輔助を藉り來たらざる可からず、蓋し今日吾人が認

めて以て確實にして寸毫も疑ふ可からざるものと爲せる健全なる科學哲學に負きて說示せられたる宗教は不幸にも吾人の尊信を今日に維くと能はざるものなればなり、然れば苟も將來に健全なる新信仰を樹立せんと欲せば必ずや當に佛基兩教の融合調和上に之れを說定し、佛基兩教を以て立教の要素と爲ざゞる可からざるや勿論なりと雖、更らに之れに加ふるに最も確實なる基礎に立てる科學哲學の智識に待たざる可からざるや明瞭なりとす、何にものゝ痴漢か敢て科學哲學を以て宗教の敵と爲し宗教と科學哲學とは百年相和す可からざる仇敵なりと爲すや、蓋し科學哲學と

宗教と相和せざる所以のものは、科學哲學と既に時世に後くれたる成立宗教とが互に衝突撞着して科學哲學は成立宗教の時代彼れを嘲笑し去るに由りて然かく云ふものにして唯此故を以て斯かる成立宗教と科學哲學とは全然仇敵の如く然るもの在りて存ずと雖、健全なる宗教と科學哲學とは單に反目疾視するの仇敵たらざるのみならず、斯かる宗教は科學哲學の應援を得て初めて成立するを得るものにして科學哲學と宗教との兩者は眞にその好伴侶なりと謂はざる可からず、否な余の嚮者に既に言へるが如く哲學卽ち宗教なりとの立脚地より觀察し而て健全なる新信仰は必ず

や哲學的方法に由れる健全なる哲學に外ならずとの見地を以てすれば、科學哲學と宗教とは單に衝突撞着せざるのみならず眞に能くその融合調和を得可きものとず余は實に斯かる意味に於て英國の哲學者フランシス、ベーコンの所謂小智は宗教を去らしむるも大智は能く宗教に敬虔ならしむとの言の動かす可からざる眞理なるとを認容せずんば非るなり。

第四節　宗教に於ける道德的方面の尊重

將來の宗教は科學哲學の提供する健全なる智識を以てその資料と爲さゞる可からざるや勿論なりと雖、健全なる新信仰は之れと同時に必ずや又社會人心の實

際上に頗る重大なる影響を有しをれる道德的方面の尊重を看過す可からざるものとす、將來の宗教は如何に自然科學や認識論的研究の結果を大成して得たる所の智識なりとするもそが、倫理道德の方面を雲烟過雁に附し去らんか、斯かる宗教は之れを吾人の哲學として考察するも頗る一方を缺如せる偏僻なる哲學なると同時に、宗教としては益々その實際的効果を失喪し結局實際上には何等の効力無きに終はる可きなり、然れど茲に注意す可きは吾人は斯く宗教の倫理的方面を尊重し之を皷吹すればとて、宗教と倫理とを全然同一視せよと云ふには非ざるなり、蓋し現今時世の風

潮は社會問題倫理問題に傾注し來り而て之等の問題の解釋に努む可きは主として宗教家の任務なりとは何人も說く所のものなるが故に、宗教は斯かる實際的方面特に倫理的方面を缺如するときは全然宗教たる能はざるが如く說き去らんとするの學者を生ずるに至り、宗教を以て倫理道德と全然一致に歸せしめんと企つるもの多しと雖、余を以て之れを見るに是れ宗教を以て道德と全然同一視せしカントの位置に復歸せしめんとするものにして、カントが宗教と道德とを同一視せし學說の如何に缺點多きかを考究し來れば、現今宗教を以て道德と全然同一視せんとする今日の學

者は宗教の本質を觀察するに頗る偏僻なるの然からしむる所なりと謂はざる可からず、余の見る所を以てしては宗教或は道德を外かにしても尙成立し得可しと雖、斯かる宗教は健全なる新信仰を渴望しつゝある現今の吾人に對しては到底滿足なる信念たるを得ざるものたると同時に、現今或一派の人々の思惟せるが如く倫理のみを宗教の本領なりと主張する學說の又到底吾人の全精神を滿足せしむるに足るもの無きを承認せずんば非ざるなり然れば余は不偏不黨宗教を觀察して將來に於ける健全なる新信仰は眞の方面よりも善の方面よりも美の方面よりも攻究闡明せられたる結果にして、換言すれば吾人の智情意全作用より成れる哲學に外かならずと斷言するに躊躇せざるなり然れど斯くして出來上がりたる宗教はその實際的方面の活動に於てはその宗教の構成に資せる倫理的道德方面を實際に振作鼓吹して以てその宗教の一大信念の下に行動云爲する一擧一動は皆な共に倫理的道德的表現たらざる可からざるものなりと謂ふに在るなり。

第五節　儀式の簡潔

以上論明したる所を以て將來の宗教の具有す可き理論的方面の性質は大體稍備はれりと考ふれども、その

者は宗教の本質を觀察するに頗る偏僻なるの然からしむる所なりと謂はざる可からず、余の見る所を以てしては宗教或は道德を外かにしても尙成立し得可しと雖、斯かる宗教は健全なる新信仰を渴望しつゝある現今の吾人に對しては到底滿足なる信念たるを得ざるものたると同時に、現今或一派の人々の思惟せるが如く倫理のみを宗教の本領なりと主張する學說の又到底吾人の全精神を滿足せしむるに足るもの無きを承認せずんば非ざるなり然れば余は不偏不黨宗教を觀察して將來に於ける健全なる新信仰は眞の方面よりも善の方面よりも美の方面よりも攻究闡明せられたる結果にして、換言すれば吾人の智情意全作用より成れる哲學に外かならずと斷言するに躊躇せざるなり然れど斯くして出來上がりたる宗教はその實際的方面の活動に於てはその宗教の構成に資せる倫理的道德方面を實際に振作鼓吹して以てその宗教の一大信念の下に行動云爲する一擧一動は皆な共に倫理的道德的表現たらざる可からざるものなりと謂ふに在るなり。

第五節　儀式の簡潔

以上論明したる所を以て將來の宗教の具有す可き理論的方面の性質は大體稍備はれりと考ふれども、その

宗教が發して外に表はれたる上に於ては斯かる宗教は果して如何なる形式を要す可きかといふに人或はユニテリアンの如く何等の宗教的儀式なるものを要せず宗教は元來吾人精神内の出來事なれば別に外形的の儀式は無用なるものなりと説くものあらん然れど余を以て之れを見るに斯くの如きは單に理論一偏に走りたる宗教觀にして、ユニテリアン等が此かる立場を得るに至りたるは畢竟在來の宗教が餘り外形的虚式に奔逸し去りたる弊害を矯正せんとして却て他の一方の極端に陷ゐりたるものと謂ふ可く、宗教の儀式なるものも必しも斯く卑む可きものに非ず否な或

程度迄は頗る必要なるものと考ふるなり、何んとなれば吾人々類は智識の外に又感情を有しその感情の發表は身體各部何れの場所をも問はずして之れを表出し得るものなりと雖、特に顏面に於ては著るしく之れを表するを得可く又手を擧げ面を垂るゝ如き行爲に由るもその内部精神上の感情を發表するを得可きものにして、人若し内に斯かる感情の潛めるあらんかそは遂に洩發して外かに表はるゝに至るものとす、然れば今若し吾人にして内に宗教的感情の充溢し來たるものあらんか、そは自ら外部に發表して此に神を讃美し經文を讀誦してその感情を外に發表し、又已れと同

一味の人々と其感情表出に由りてその精神を交換し以て同情同感互に宗教的滿足を活ふを得るに至るものとす、今宗教の儀式なるものにして斯かる健全なる宗教上の感情を發表するの要具として存在しをるものなりとせば、吾人は單に斯かる儀式を殄滅するの必要を見ざるのみならず尙一層之れを將來に保持し又發達するの必要ありて存するを感ずるものなり、何んとなれば斯かる宗教上の感情中に起こるあらばそが洩發して外に表はるゝや眞個に自然の結果たるものにして、恰も人のその父母昆弟の死に當りて之れを傷むに涙を以てし演劇に遊びて拍手喝采すると一般な

れば、然れば斯かる意味に於て吾人は宗教的儀式の存續を主張し彼の床護を燒きて疾病の平癒を祈り餓鬼に供養すと稱して供物を供へ其他幾多迷信の結果生じ來たれる宗教上の儀式は全然之れを排斥せざる可からず、彼の經文讀誦の如きもその動機一に迷信に在りて存するものは又之れを廢す可きなり、是れ眞に神聖なる經文そのものを汙瀆するに過ぎざればなり。

之れを要するに健全なる新信仰に要する宗教の儀式は一言以て之れを覆へば、彼の不健全なる迷信的信仰の結果に出づるものは一切之れを排除し去りて健全

なる信仰の活泉より混々として湧出し來たるの宗教的儀式の純潔簡約なるものゝみ能く之れを保存持續し措く可しと謂ふに在りとす。

第六節　迷信的宗教は果してその痕跡を社會に勦絶し得可き乎

以上論明せるが如き宗教は時代精神の要求する最も健全にして斬新なる信念なり、中等以上の智識を有して彼の現今に增大せる智識經驗は舊宗教を以てしては到底滿足する能はず從つて日夜に煩悶苦惱しつゝあるの人士の精神的需要に應ぜんと欲するの新信仰なりとす、何んとなれば斯くの如くならずんば到底這

種人士の精神的需要を滿足せしめ能はざるを以てなり、然れど縱令斯かる健全なる新信仰は一方に樹立したればとて、即座に現今世間に流布しつゝある所の迷信的淫祠や腐敗せる舊佛教淺薄なる民間基督教をして一敗地に塗みれしめ、俄然として現今の社會にその痕跡を絶たしむるには至らざる可し、何んとなれば現今の進歩せる社會に於ても人智の懸隔は尙著るしきものよりて存し、今日現に吾人の眼を以てしては如何にも迷信としか見るを得ざる所のものゝ、尙眞面目にその信仰をるもの世間に頗る多く、斯かる儕輩に在りては吾人の要求する如き健全なる新信仰は却てそ

の耳に入り難く、猶に小判の嫌無き能はざるなり、然れば余の云ふ如き健全なる新信仰の樹立は縱令その今日に求め得可しとするもそを以て一時に社會全般の人心を統一せんとするは到底不得能の事に屬するものとす、是れ單に今日に不可能なるのみならず釋迦基督の昔時に於ても等しく不可能なりしなり、是れ釋迦一たび出でゝ佛教を稱道するも婆羅門教は依然として印度の社會に存在しをりしなり基督一たび起こりてその福音を宣傳するも猶太教は尙依然として猶太の人民中に行なはれをりしなり、否な啻に基督や釋迦の當時に猶太教婆羅門教の基佛兩教と共に併存しをり

しのみならず、猶太教は基督の死後二千歲の今日尙歐洲の天地に跋扈しつゝあり、婆羅門教も亦佛滅後二千有餘年の今日印度の社會にその勢力の衰へたりとも見ずず、然れば釋迦基督の聖賢偉人の當時にして既に然り、矧んや今日に於て一新信仰の樹立と共にその新信仰は如何に健全なればとて之れに由りて現今の社會に於ける一切の迷信を一朝勦絕し去らんとするが如きは泰山を挾みて北海を越にんとするの非望なりと謂ざる可からず、蓋し現今に於ける社會人智の懸隔は貧富の懸隔と同く頗る甚しきのもありて存し、吾人中以上の智識を有するものゝ眼を以て見るときは不

健全なる迷信と見ゆる所の嬉祠も彼等下層社會の人民に在りては今日尚實に立派に健全なる宗教にてあるなり、然れば斯かる人民が斯かる迷信を捨つる能はざるは今日吾人が吾人の信仰を破却し能はざると一般なれば、斯かる人民に向て俄然その人民をして彼等の奉せる不健全なる迷信を捨て我等の信ずる健全なる新信仰に就けよと如何に大聲疾呼するも到底馬の耳に念佛にして彼等はその意味を解せざるを如何んせん、是れ今日如何に健全なる新信仰の樹立を見るも日本全國の人民を擧げて一人も殘さず即坐に一擧し、直ちに之れをその新信仰中に網羅し得ざる所以なりとす、然れば彼等人民をして自家所信の宗教の迷信たらしむるを知りて之れを捨てゝ健全なる信仰を得んと努めしむるに至るは先づ他の方面より彼等の智識を進歩せしめざる可からず、換言すれば彼等を教導する普通教育の普及を計からざる可からざるものとす、既に普通教育に由りてその自然科學の理を知るに至るや彼等無智の頑民も遂にその智能を啓發し來たりて此に始めて在來の迷信的宗教を以て滿足しをる能はず從て此に初めて健全なる宗教を欲求するに至るものなり、果して然らば此時や實に是れ彼等無智の頑民も亦吾人と等しく健全なる信仰の活泉を味ふを

得るの時にして、吾人の今日所謂健全なる新信仰の一般的普及を期するは實に此時を待たざる可からざるものとす、然れど斯く云へばとて余は既に健全なる新信仰を獲得しをれる宗教家に向て普通教育の一般に普及する迄は拱手相待ちてその宗教の宣布を延引せよと勸むるものに非ず、否な宗教家は自信教人信の大聖旨を奉戴して無智の頑民をして一日も速かにその眞理の活泉を掬し醍醐の妙味を嘗めしめんが爲めに、百方布教の方法を攻究し、或はその布教の方便手段として先づ彼等人民の普通教育を進めんとすると自ら盡力するも可なり、何んとなれば斯く普通教育の如き

前門を經るに非ずんば健全なる宗教の堂奥に彼等を引入するを得ざればなり、斯くして宗教家は自信教人信百の群羊中その一をも殘さず大悲傳普化の聖旨を實踐躬行するに至らば此こに健全なる新信仰をして社會に普及するを得可く、斯くして人種の黄白を問はず洋の東西を擇ばず人類一般に等しく一味の安心に歸入し止住せしむるに至るも亦決して不可能の事業に非ずとす、此に於てか余は最も廣き意味に於て約翰の所謂遂に一つの群れ一の牧者となる可しとの信仰界を實現し得可きを信ずるものなり。

宗教の將來終

88
103

明治三十四年三月二十日印刷
同　年三月廿五日發行

定價金四拾錢

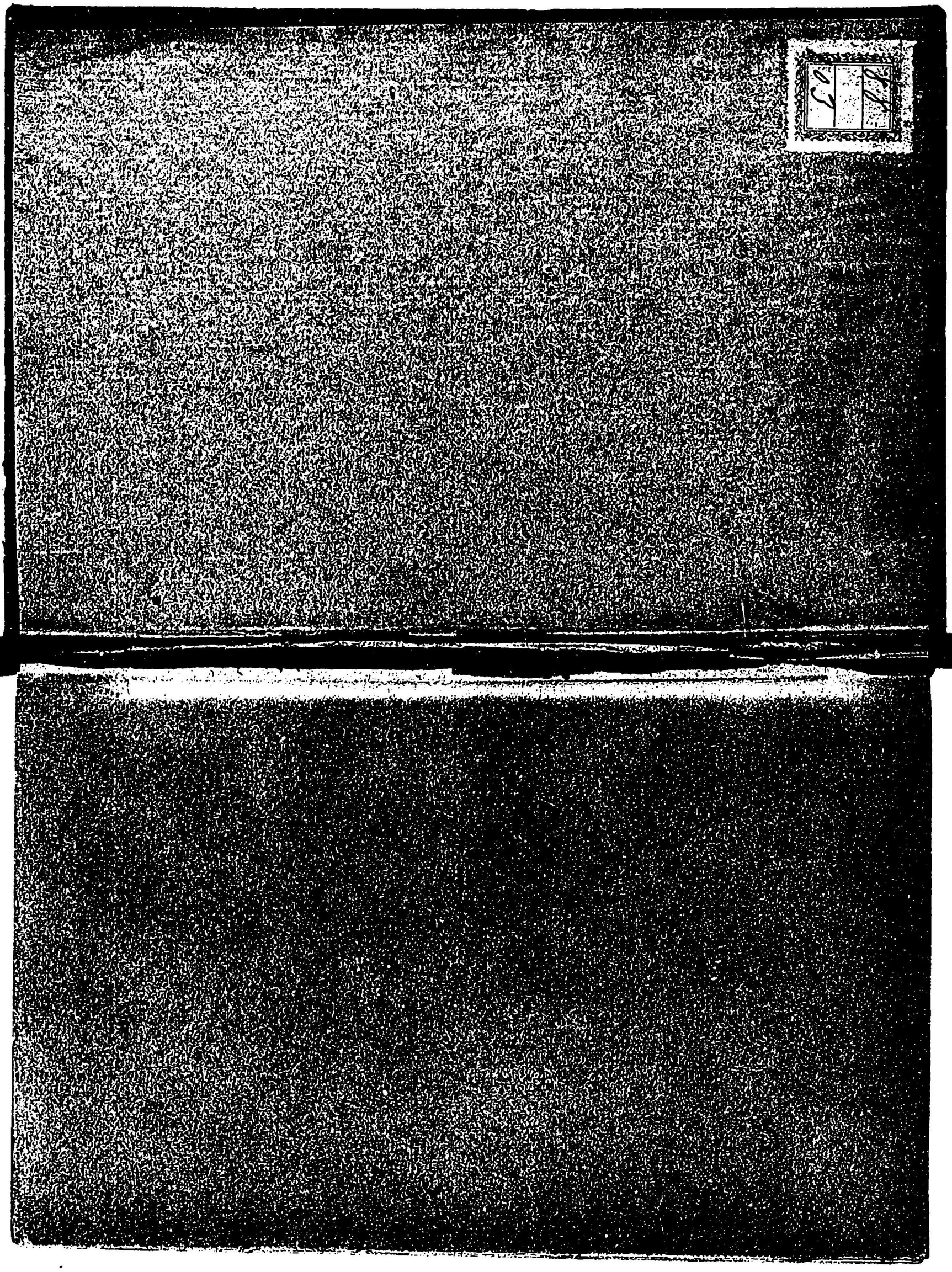
著作權所有

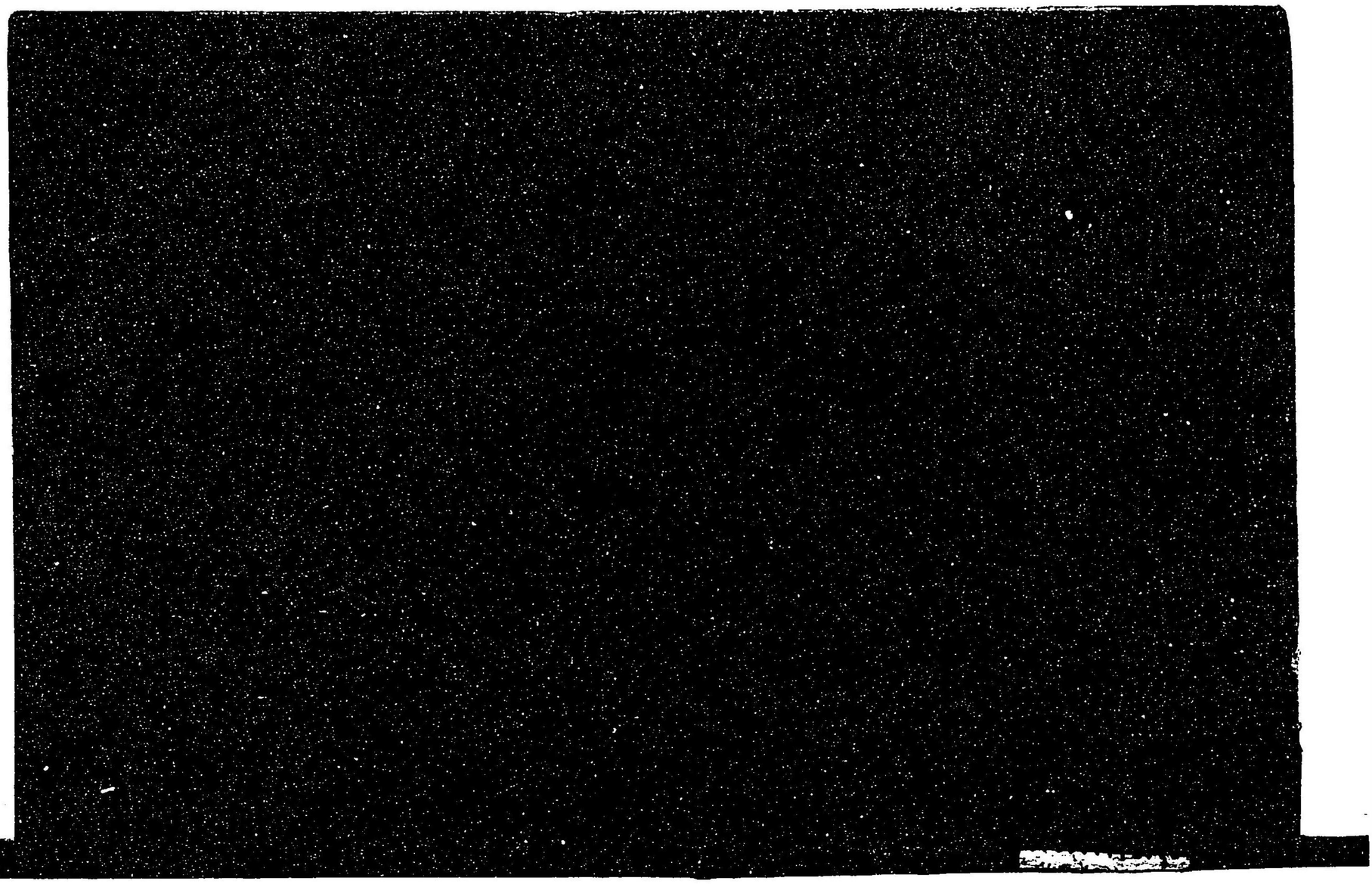
著作者　加藤玄智

發行兼印刷者　京都市下京區中珠數屋町烏丸東入二十八講町二十二番戸　西村七兵衛

發行所　京都市東六條中珠數屋町　法藏館

9. 2. 23





38
103

013645-000-4

88-103

宗教之将来

加藤　玄智／著

M34
ABA-0114